

2 研究の実際 > (2) 「強み」に関する活動プログラム

ク 検証結果<小学校> A小学校 第6学年 対象者数24名(うち、回答者数22名)

【検証の視点 I】「あなたのおよとこ SAGA シート (自己肯定感チェックシート)」

児童がもつ「強み」に着目した交流活動が自己肯定感の高まりにつながったか。

【検証の視点 I-A: 「自分自身に関する自己肯定感」に関する項目】

【検証の視点 I-A-(a): 「自尊感情」に関する項目】

【検証の視点 I-A-(b): 「自己主張・自己決定」に関する項目】

キ 検証内容と検証方法 について

↑こちらをクリックすると、検証内容と検証方法を見ることができます。

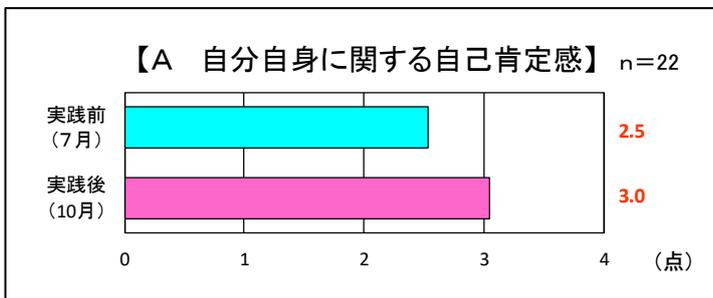


図1 児童の「自分自身に関する自己肯定感」に関する意識の変化 (全体)

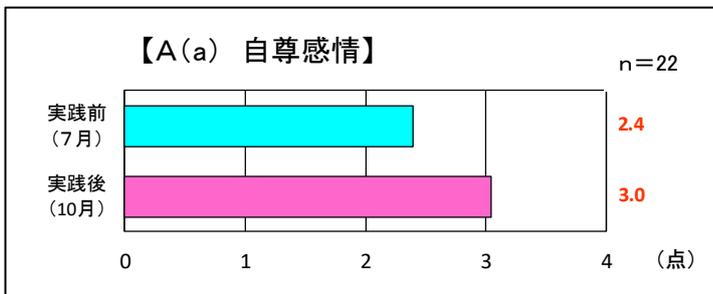


図2 児童の「自尊感情」に関する意識の変化 (下位尺度)

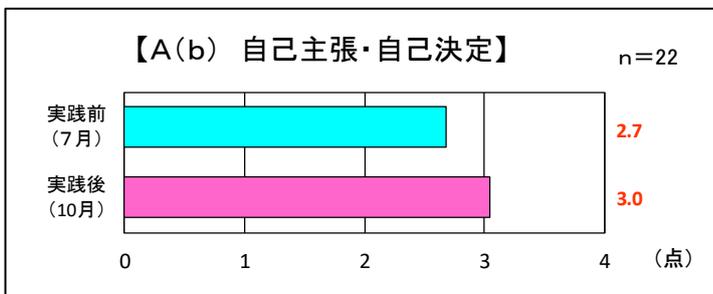


図3 児童の「自己主張・自己決定」に関する意識の変化 (下位尺度)

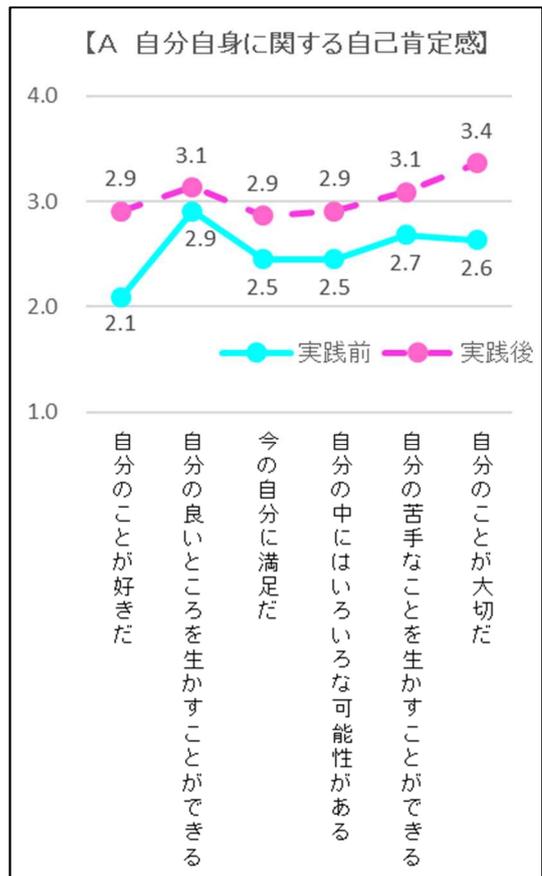


図4 児童の「自分自身に関する自己肯定感」に関する意識の変化 (項目別)

○授業実践の前後で、全体では数値が0.5ポイント上がりました（前頁図1）。また、下位尺度では「自尊感情」で0.6ポイント、「自己主張・自己決定」で0.3ポイント上がりました（前頁図2、図3）。項目別でも全体的に数値が上がっており、特に、「自分のことが好きだ」「自分のことが大切だ」で0.8ポイント、「今の自分に満足だ」「自分の中にはいろいろな可能性がある」「自分の苦手なことを生かすことができる」で0.4ポイント上がりました（前頁図4）。また、児童の振り返りシートには、「ぼくは発表をすることが苦手だった。でも、『強み』を生かせば発表をすることがだんだん当たり前に感じるようになった」「『強み』を知ることで、苦手なことが分かったり、苦手なことを減らすために努力をしたりする気持ちが出てきた」「自分の『強み』を生かしていこうという自信が付いた」などの記述が見られました。これらのことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して、児童が「強み」への理解を深めながら自分の「強み」を知ったことにより、「自分自身に関する自己肯定感」を高めることができたと考えます。

**【検証の視点 I-B：「友達との関係を通した自己肯定感」に関する項目】**

**【検証の視点 I-B-(a)：「関係性」に関する項目】**

**【検証の視点 I-B-(b)：「自分は価値のある人間」に関する項目】**

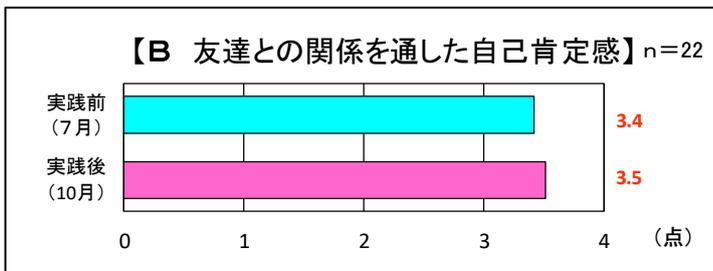


図5 児童の「友達との関係を通した自己肯定感」に関する意識の変化（全体）

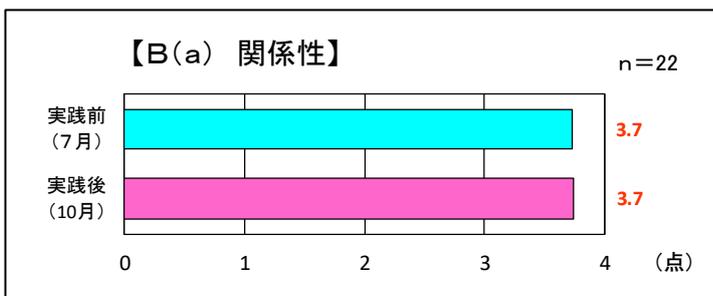


図6 児童の「関係性」に関する意識の変化（下位尺度）

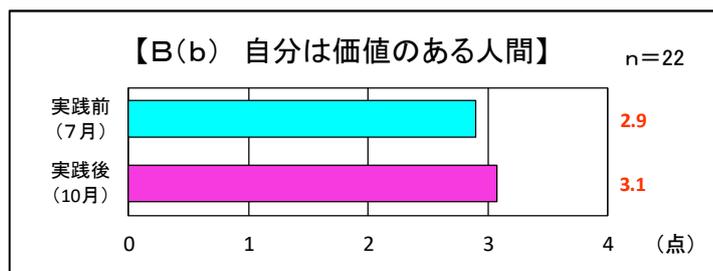


図7 児童の「自分は価値のある人間」に関する意識の変化（下位尺度）

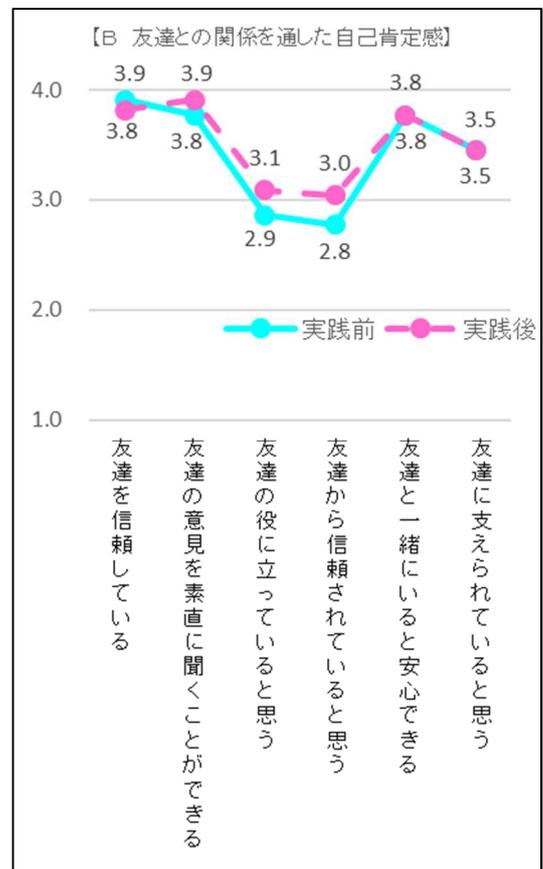


図8 児童の「友達との関係を通した自己肯定感」に関する意識の変化（項目別）

○授業実践の前後で、全体では数値が0.1ポイント上がりました（前頁図5）。下位尺度では、「関係性」での数値の変化はなく（前頁図6）、「自分は価値のある人間」で0.2ポイント上がりました（前頁図7）。項目別では、数値に大きな変化は見られませんでした。が、「友達の役に立っていると思う」「友達から信頼されていると思う」で0.2ポイント上がりました（前頁図8）。児童の振り返りシートには、「自分の知らない『強み』をみんなが見付けてくれたおかげで、それを生かしていこうと思えた」「みんなからアドバイスをもらって、苦手なことを得意なことに変えることができた」「自分に自信がもてなかったけれど、友達と伝え合って自信がもてるようになった」という記述が多く見られました。これらのことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して児童が自分の「強み」を友達から伝えてもらうことは、他者からの評価を意識し始める高学年の児童にとって、「友達との関係を通じた自己肯定感」を高めるために有効であると考えられます。

◎以上のことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動が自己肯定感の高まりにつながったと考えられます。自他の「強み」を知ったり、互いに伝え合い認め合ったりするような交流活動は、「自分自身に関する自己肯定感」よりも「友達との関係を通じた自己肯定感」が元々高い児童の実態に即した有効な手立てであったと考えます。今後、「自分自身に関する自己肯定感」と「友達との関係を通じた自己肯定感」における下位尺度「自分は価値ある人間」が低く、自分への評価が厳しい児童が、自分自身を肯定的に自己評価することができる段階まで高めていくためには、児童が互いに自他の「強み」を伝え合う活動を継続的に繰り返し行うことが必要であると考えます。そして、自己肯定感を高めることにより、児童が自他のよさを認め合う学級集団づくりにつなげていきたいと考えます。

【検証の視点Ⅱ】「がばいシート」

児童がもつ「強み」に着目した交流活動が互いに自他のよさを認め合うことのできる人間関係を築くことにつながったか。

【検証の視点Ⅱ－A：学級の雰囲気】

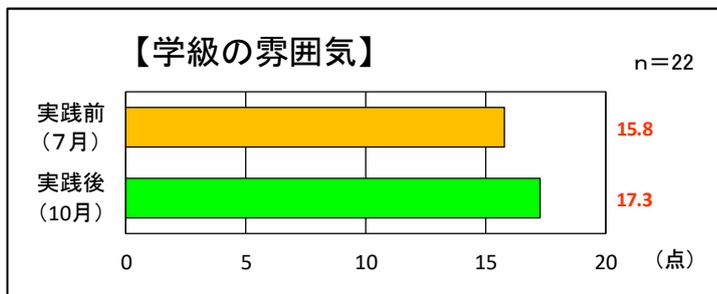


図 9 児童の「学級の雰囲気」に関する意識と行動の変化 (全体)

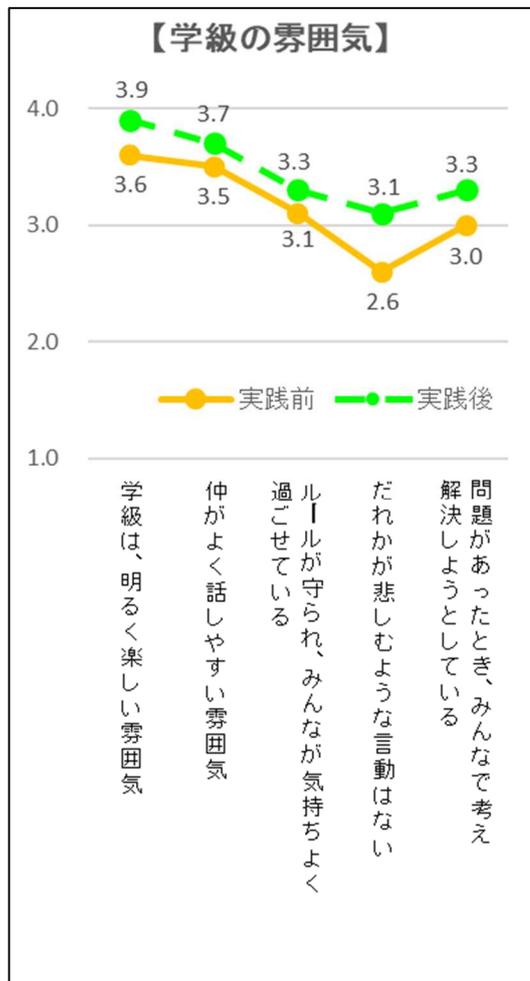


図 10 児童の「学級の雰囲気」に関する意識と行動の変化 (項目別)

○授業実践の前後で、全体では数値が 1.5 ポイント上がりました (図 9)。項目別でも全体的に数値が上がっており、特に、「だれかが悲しむような言動はない」で 0.5 ポイント、「学級は、明るく楽しい雰囲気」「問題があったとき、みんなで考え解決しようとしている」で 0.3 ポイント上がりました (図 10)。また、児童の振り返りシートには、「学級のみんなには『強み』があって、自分には自分の『強み』がある。それを見付け合って生かそうと思った」「学級のみんなそれぞれの『強み』があることを知った」「これからは、自分の『強み』だけを生かすのではなく、友達の『強み』を見習っていききたいと思う」などの記述が見られました。これらのことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して児童が互いに自他の「強み」を伝え合ったことにより、互いの「強み」を認め合う雰囲気が醸成されて、「学級の雰囲気」が良くなったと感じられるようになったと考えます。

## 【検証の視点Ⅱ-B：友達との関係】

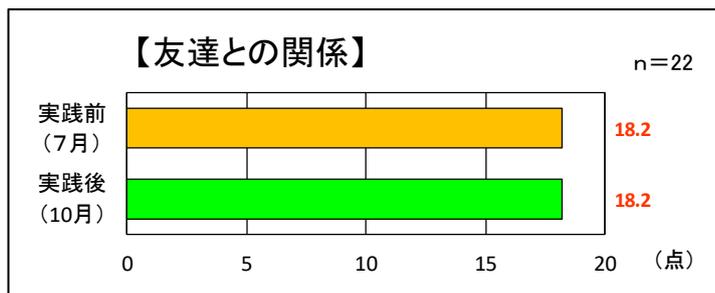


図 11 児童の「友達との関係」に関する意識と行動の変化（全体）

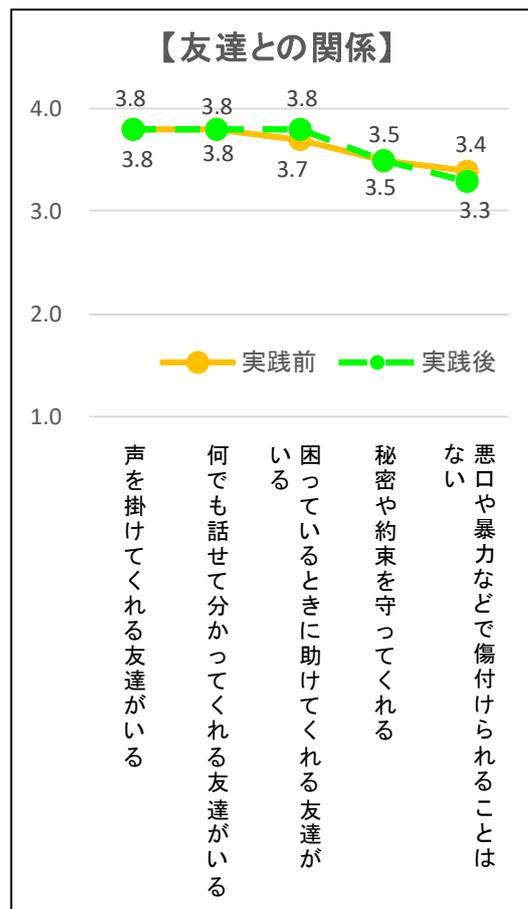


図 12 児童の「友達との関係」に関する意識と行動の変化（項目別）

○授業実践の前後で、全体での数値に変化は見られませんでした（図 11）。項目別でも、数値に大きな変化は見られませんでした（図 12）。その理由として、実践前の数値が高かったことから、学級における「友達との関係」が元々良好であったことが考えられます。また、児童の振り返りシートには、「友達の『強み』をもっともっと知りたい」「発表が苦手だけどグループの中では発表ができた」「友達に伝えることができて良かった。いろいろな友達のことが分かって良かった」などの記述が見られました。これらのことから、数値に大きな変化は見られなかったものの、児童がもつ「強み」に着目した交流活動を通して児童が互いに自他の「強み」を伝え合ったことにより、グループ内での互いに対する信頼感が深まり、今後、学級における「友達との関係」が更に良くなっていくことが期待できると考えます。

◎以上のことから、児童がもつ「強み」に着目した交流活動が互いに自他のよさを認め合うことのできる人間関係を築くことにつながったと考えられます。その要因として、「友達との関係」が元々高かったため、交流活動で安心して自他の「強み」を伝え合うことができたことが考えられます。今後、「学級の雰囲気」と「友達との関係」をよりよくしていくためには、児童が互いに自他の「強み」を伝え合う活動を継続的に繰り返し行うことが必要であると考えます。そして、自己肯定感を高めることにより、児童が自他のよさを認め合う学級集団づくりにつなげていきたいと考えます。